



となりの柿はあかい・2012年

野生の版画家 たけがみ たえ に聞く

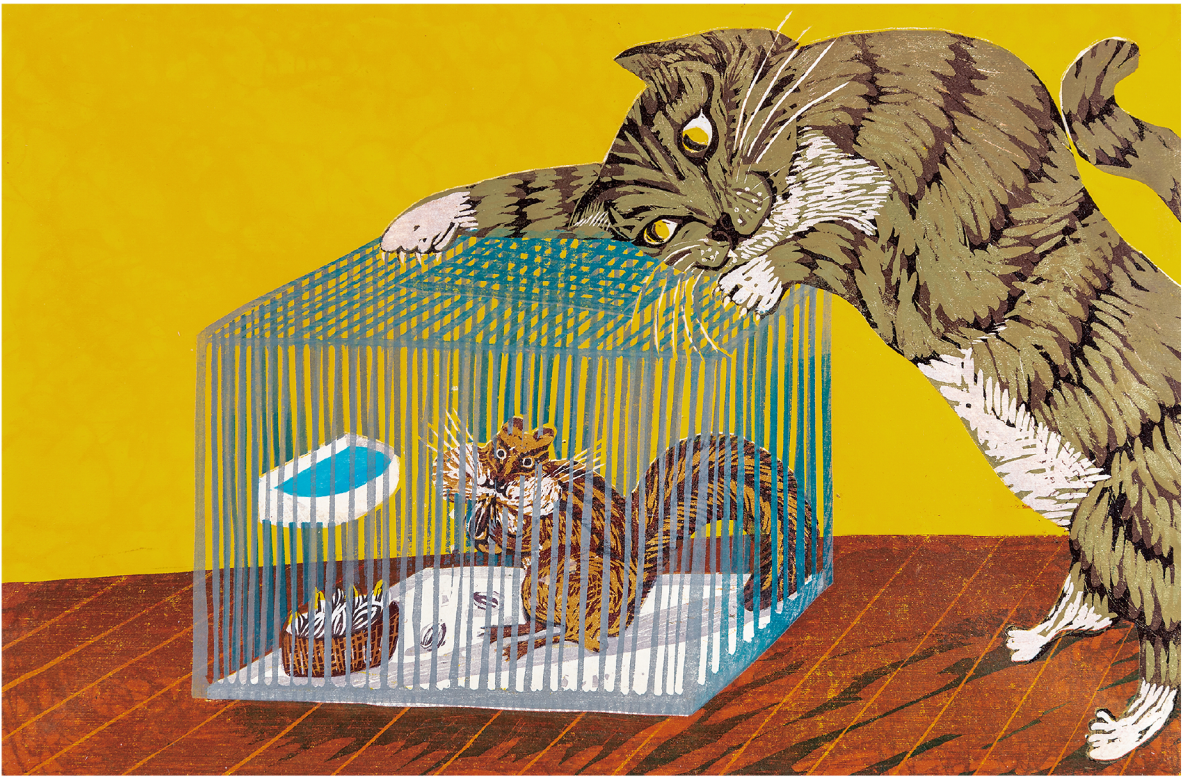
和光大学表現学部芸術学科を2008年に卒業したたけがみ たえは、木版画家として近年活躍が目覚ましい。若手でありながら多忙を極めるたけがみの近況と現時点までの足跡をインタビューした。(聞き手／編集は芸術学科教授半田滋男が担当した)

—自然がモチーフ

今の住居は町田だけど、タヌキとハクビシン、アライグマが住みついている。あと犬を飼っている。子どもの時は世田谷区の千歳船橋で育った。多摩川の近くで魚捕りが大好きだった。小学校から和光小学校。大学3年生の時に鶴川に引っ越した。世田谷も町田もそこらにそんなに自然がいっぱいある場所ではないけど、大自然って言うより、そのへんの自然でもう充分。小自然で。サトヤマ的な。小学校3年の時に養蚕の勉強があって、エサの桑の葉を常に探してないといけなかったんだけど、意外とあるんですね。生き物とか植物とか意外とあるなって。身の回りにある自然を楽しんでた。そんなに大層な自然は求めてない。私、生まれて最初に発した言葉が

「マンマ」とかじゃなくて「ドテ!(土手)」だったそう。

卒業制作の「動きだしたら」は、長野の山で放牧されてる牛。夜、星の観察会で牛が放牧されているところを通って山頂に行ったんだけど、その途中で牛に囲まれた。牛って結構人に寄ってくる。じっとみたり、暗闇で牛ってけっこうこわい。印象深かった。木版画。そもそもそれまではリトグラフでやってたんだけど、卒制だから大きくしなないとけないと思ひこみ、過去の卒業生の見て大きいのやりたいというのもあったから。「じゃ、木版しかないでしょう」ってなって、サブロク版を3枚合わせた大きさの牛を作りました。それが木版の最初。白石昌夫先生が画材を教えてくださいました。はじめて挑んだから。テーマはあとで本にした『みたら みられた』と



『マンボウひまな日』原画《タネ食うリスもドキドキ》

共通してて、なにかがはじまりそうな、こわさというのを、牛と目が合ったときに感じたから。動き出したらどうしようという感じで。

その観察会って言うのは、中学生の時から入った「和泉多摩川ナチュラルリストクラブ」っていう自然教室。大学生がリーダーで、観察会を企画したり自然あそびを満喫する会。ボーイスカウト的な感じがするけど、そうじゃなくて動植物調査とか、地域環境的な仕事をしている人たちが立ち上げた会。タヌキを研究している人とか、カタツムリを研究している人、鳥を研究している人とか、そういうプロたちが仕事でやってるテクニックを一緒にあそびながら子どもたちに伝えて、結構サバイバルなことをやらしてもらえる。私、いろんな人がいるところに行く緊張してすごい苦手。宿舎とかも嫌だし、知らない人と何かやるっていうの嫌だったんだけど、なぜかそこは楽しくて続ける。「じゃあ、今日の感想を書いてみよう」みたいないやらしいところ、何かを学ばせたいっていうような変なところが全くなかったからだと思う。

そもそもは、和光小学校で4年生のときにある多摩川学習っていう総合学習がきっかけ。世田谷の校舎だったから一番身近な川の研究っていうので多摩川。鶴川小学校は鶴見川なのかな。世田谷の小学校は4年生が多摩川を研究してて、で魚釣りグループ、

化石グループ、動物グループとか分かれてて好きなグループに自分で入るんだけど、私は魚釣りグループに入った。それで多摩川に網を持って入るとすぐいろんな魚とか、カエルとか、ウシガエルの卵とかいっぱい捕れる。今は川の形変わっちゃってるから雑魚釣りできるような場所なくなっちゃってるかもしれないけど、私が4年生の時は外来種から在来種までけっこう捕れて、そのトキメキがもう。そもそも魚釣りとか大好きだったんですけど、この授業で好きなことをやってるっていう「いいんですか」みたいな高まる気持と、「あそびじゃん、授業でこんなに楽しくていいのって」のがあいまってすごく楽しくて。その影響で結構休みの日にも親が連れていってくれたりするようになって。でもそうこうしているうちに私も5年生になってしまってた多摩川学習も終わっちゃって、しょんぼりしてたんだけど、その4年後に妹が4年生になったから、中2の分際で小学校4年生の多摩川学習についていっていっしょに魚釣りとかしてたら、友だちのお母さんが、そんなに好きならこういう会があるよって教えてくれた。そういうことやってるうちに自然がモチーフになってきたのかな。

——それが何で美術の道に足を踏み入れたのか

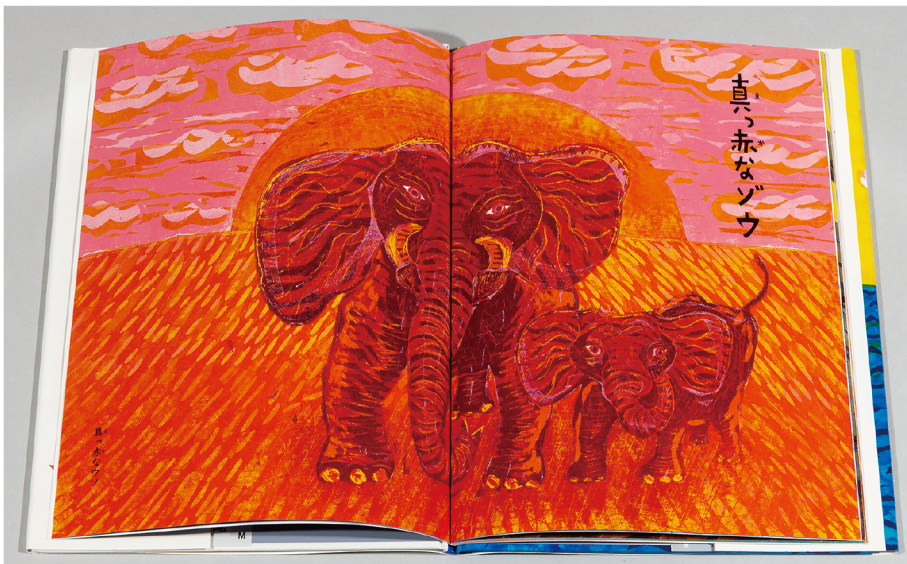
そもそも絵を描いたり好きだったんです。コッ



「マンボウひまな日」原画《ねこにごめん！》



「マンボウひまな日」原画《蚊も泣くフカも泣く》



『マンボウひまな日』《真っ赤なゾウ》・2017年

コツって言うよりも思いついたらワーって作って。丁寧にはないけど。で、なんかいつも褒めてもらえたから、私は得意なんだって言う思い込みはずっとあって。だから高校入学して美術部入って全然行ってないけど、美術展だして。そこでも家族以外の大人、先輩達が「面白いの描いてるね」って言うてくれた。で、「私は芸術の道かな！」って思った。こんなに楽しかったら、多摩美、武蔵美とか、芸大とか、そっちにいけばいいのかなって思って、高2の時に予備校、お茶美に通いはじめた。そこではじめて楽しいだけじゃない、人が競り合う、絵を描くことに対してすごい緊張感のある所を知った。上達するように頑張ったり。講習会があって、上手いのは貼り出されて、選ばれなかったら泣いてる人がいたりとか。それがイヤだったわけではないけど、ものすごい緊張する場所だった。いつも「ああ行きたくないなあ」って思いながらも行ってた。それで入試の模擬試験。はじめて国語のテストで穴埋め問題っていうのがあった。ここに当てはまる言葉はなんですか、とか。それ全くわかんなくて。「ああもうだめだ」ってなってきたときに、「和光大学で版画もできるんだ」って分かって。じゃあ推薦で和光でいいじゃないかってなった。それで頑張るのをやめて近所の成城美術研究所っていう予備校に変えた。そこだと家も近いし、わりといろんなことをやりたい人が来てたから。けっこう年取ってる人も子どももいたし。一所懸命やってる人ももちろんいたけど。そこでデッサンを教えてもらいながら内部推薦で和光大学に入った。

それで、何で版画だったんだろ。そう、高校生の授業の時に、授業で版画をやるのがあって、めくっ

たときに凄い楽しかった。版画は逆になる。見たものとは逆のものがこっちに出てきて、絵とはちがうしっかりしたかたちが現れてくるから、それも魚捕りの時と同じようなトキメキがあって楽しい。自分にじっくり来る、それでなにか

漠然と版画やりたいなと思ったんですね。魚捕りの時は、網を揚げてみるまで何があるか分からない、版画はどんなふうにするのか分からない、でたときにはこうやって出るのか、みたいな気持ち。絵だとも目の前に進んでゆけど、ドキドキする瞬間が魚捕りにも版画にもあって、全然関係ないようで同じトキメキだなあって、やりながら思うことがある。とにかく、あんまりコツコツとか計画的ってことはなくて、やってみたらよかった、失敗もあるけど、そういう手応えのほうに惹かれちゃう。絶対いいに違いないって言う期待にかけちゃうから、それがすごいあってるんだと思う。頭で覚えるんでなく感覚。

—— 版画の技法、彫り進めについて

まずしっかりと下絵をかく。版画になったときに完成に近い下絵。色もつけて。その上にトレーシングペーパー乗せて線に起こして、線に起こしたものを版木に写して、おおまかに色ごとに版を分けていくんですけど、ほんとだったら版画は色ごとに版がないと摺れないけど、それを最初のうちやってたら、私のこのデタラメさで絵がどンドンズレていって。動物を彫ってるときに毛並みを適当に彫ってたらけっこういいやってなって、彫り進めをすることになったんですけど。まず、タヌキだったらタヌキのシルエットを彫り残してインクを載せる、摺る、めくる。次またこの版を彫る、毛並みとかそういうタッチを付けて彫る、ちょっと濃いインクを載せて摺る、また毛並みを彫るともっと細かい毛並みでできてきて、また濃いインクをのせて摺るとでき上がり。赤の上に緑とかは乗せなくて、割と同じ系統で色が重なっていくのが多いから。全く違う色は別版。あと



『マンボウひまな日』 原画《みみずに水》



『マンボウひまな日』 原画《サルも来たらおやつ》



『だんだん だんだん』・2021年・ひさかたチャイルド

から増刷はできない。

——絵本にかかわるようになる

大学卒業して1年残って、研究生でね。「家で作業なんかできるはずないでしょ」っていうのがあったから。残って、作業して、それから作家活動みたいなことはじめてたんですよね。「じゃ、私は作家になるんだ」って。就職活動もしてないし、ていうかしょうとも思ってなかったのもあったけど。残って作業して、卒業制作の後にはじめて個展をしようって目標をつくって。表参道で個展をしたんです。そのときの手応えがすごく良くて、「私の絵を見に来てくれる人がこんなにいるんだ」って思って。展示をやっていかないと作品も増えていかないだろうなっていう自分の性格もあって、なるべく個展の予定をいれたり、声をかけて展覧会をやらせてもらえるようになって、展示で在廊することも増えていった。そのうちに作品についてお客さんに話さなくてはならないことが増えて、「どういう意味ですか」とか聞かれたときに調子合わせて適当なこと言っちゃったり、あとで「本当は違うんだけどな」って思うことがけっこうあって。まあどういふふうに捉えられてもいいんだけど。でも私のは一応自分におきたでき事をテーマにしてるから、これ文章に書いちゃった方が早くなって思って、あるときから版面に少しだけ文章つけるようになったら、出版の人が「面白いね」って言うてくれて。そこから出版物っていうのもあるんだって新たな世界がちょっとだけ見えてきたけど。私もそんなにそっちがんばろうっていう力はないから、そういう世界もあるんだって思った矢先に鈴木海花さんという人が、虫探しに連れてってくれた。それで「今度『虫目』のススメ」という本出すけど表紙にたえさんの作品使っていい？」って言うてくれて。使ってもらって

はじめて印刷物になったのを見たときに、またトキメキがあった。こうやって知らない人たちが見るんだと思ったら、すごいなと思うようになった。それで、またさらにそこでいい

なって思いはじめてたときに、「一緒に本を作りませんか」って言うメールが偕成社の人から届いて。編集の人たちは、「竹上さんのそもそもの文章、あのままでいいですよ」ってなこと言うてくれるんですけど、あれを32ページに延ばすって言うのは私にはすごい難しい。文章にしていくと。「山場がない、どこが盛り上がりなのかってのがわからない」って言われるんだけど、そもそも私が体験してること自体そんなに盛り上がりがあることじゃないから、人に受けるようなダイナミックなお話っていうのはなかなか難しいんだけど、それなりに私の世界観の中では淡々と書きつなげていってる。でもいろんな意見とか貰うから、ひとりだとあれだけど、手が入るから。修正っていうか、話し合い、打ち合わせが密にあるから、そこで使ってこなかった頭を使って、なんとかやってる感じです。ただ、なんかポンポンぽんと進むこともあるし、6年くらいずっと同じことやってる仕事もあるし。タイミング。自分の口調に近い感じで書くようにしてます。口調って言うか、くさくなっちゃうのがイヤで、人間っぽい感じにならないように。だから虫にしたり。『きょうは泣き虫』なんか、学童保育の子どもをみてて思いついたけど、子どもにすると、いやらしいっていうか、こういう子もいるってストレートすぎてイヤだなって思って、きっと虫の世界でもこういうことあるんだろうなって思って、虫に置き換えた。ちょっと照れ隠しみたいなどころある。そこから徐々に。いつの間にか12冊になった。

——学生時代にまなんだこと

学生時代のことだけど、大学にいるとき、ヘンテコな友だちできたよ。ヘンテコなのね。関わり方がよかったんだよね。今でも仲いい。みんな、やってることはそれぞれバラバラだけど、いろんなこと



楽しみの み・2016年



コレクションから逃げる・2014年



『きょうは泣き虫』・2019年・好学社

知ってるし、教えてくれるし。なんの話したか忘れてるけど、いつも笑ってた。こんなに気が合う人が新しくできるんだなって。うん。なんか、そう。やっぱり気付かなかった所、大学3年生にしてあった。下からの和光育ちの外に交友範囲が広まったところ、作品作る上でも影響してるかも知れない。版画室で自分が好きなことするようになってできた友達っていうのは全然気を使わなくて、気楽で。約束しないでも会えるし。もういい環境が整ったかも。



制作中のたけがみ たえ

友だちが増えて。アトリエって言う自分の居場所ができたのが。アトリエ拠点に世界広がった。卒業制作がはじまってから、他のゼミから「ご飯できたよー」っていう声が入って、食へに行ったりとか。指を切ったら先生に病

院連れていってもらったりとか。アトリエはよかった。大学で居場所があるっていうのは大事だから。子ども同士って「ともだちになろ、いいよ」ってのあるかも知れないけど大学生はさすがにそれないから、あの人がいるからなんとなく喋るっていう感じ。あの人が、今では出版社、デザイナー、小学校の先生とかやってる。日本海で漁業やってる人もいれば、制作続けてる人もいる。あとね、さっきの予備校の話とつながるのは、和光大学は緊張しなかった。競り合うのがまったくなかったから。何にも考えないで続けてこられた。木寺啓幸先生もいつも穏やかで野放しで、それで展示する機会いっぱいあったのがよかった。ゼミ展とか。ほかのゼミの先生もみてくれたり。他の大学行ったことないからわからないけど。ライバル意識みたいのあったら一発でしょげてたかも。そう思うとこわい。予備校で、最初から私にはこれ違うって気付いてよかったよ。

アトリエでみんな制作していく時期に入っていく空気はわくわくしたな。でも最近の子は早く帰るよ。早く帰ってほしいゲームがあるんだって。アトリエでゲームでも制作でもすればいいのに。

たけがみ たえ：1986年東京都生れ。2008年和光大学表現学部芸術学科卒業。卒業以降木版による作品を多く制作発表。

2011年熊谷守一大賞展奨励賞受賞。

2016年以降、URESICA(西荻窪、東京)等で個展開催。2017年『マンボウひまな日』(絵本館)で絵本作家としてもデビュー。以降『みたらみられた』(アリス館)『あめちゃん』(好学社)『うみのあじ』(あかね書房)など。

2019年から和光大学非常勤講師。2022年7月には町田市文学館での個展を控えている。